# 大雨・降ひょうに対する農作物の技術対策について

令和元年５月２０日
印旛農業事務所改良普及課

銚子地方気象台の発表（大雨と高波及び突風に関する千葉県気象情報第１号　令和元年５月２０日１１時１０分）によると、千葉県では、２１日は、大気の状態が非常に不安定と　なって、雷を伴って激しい雨が降り、大雨となるおそれがあります。また、落雷、突風や降ひょうにも注意が必要です。

ついては、次の事項を参考に、技術対策を実施してください。

## １　ナシ

### ＜事前対策＞

（１）多目的防災網を展張し、被害の発生を未然に防止する。

（２）排水条件の悪い園では滞水しないよう排水対策を実施する。

### ＜事後対策＞

（１）薬剤散布

ア　葉や幼果が損傷している場合

防除暦を参考に、記載されている農薬を被害後２～３日経過時点で散布する（雨が降る前に）。

イ　枝や幹に被害がある場合

直ちにトップジンMペースト原液を枝や幹の損傷部に塗布する。塗布が遅れると傷の回復が悪く、枯れ込みが多くなる。また、展葉も遅れる傾向があるので、塗布が遅れないようにする。被害面積が大きい場合は、被害程度の大きい園や「幸水」園を優先する（※折れた枝は切り返してから、塗布する）。

ウ　疫病対策

降ひょう、雨風によって疫病の感染が懸念されるので、被害後観察を丁寧に行い、発生が見られたら、直ちに罹病枝を切り取り園外に持ち出し、アリエッテイ水和剤1,000倍液を散布する。

（２）被害樹の管理

ア　下記の被害程度に応じて花芽を整理する。

激甚園（残存している葉の損傷が70%以上、または、落葉30%以上）

⇒　全幼果を摘み、樹勢回復に重点を置く。

甚　園（残存している葉の損傷が50～70%、または、落葉程度30%未満）

⇒　被害程度に応じた着花量調節

a　落葉程度30%の場合・・・・・平年の40～50%の着花量にする。

b　〃　20%　〃　・・・・・・　60～70%　〃

c　〃　10%　〃　・・・・・・　70～80%　〃

ただし、樹勢が低下している園では、被害程度に関わらず全幼果を摘む。

中～軽程度の園（葉の損傷はあるが、落葉はほとんど認められない）
⇒　樹勢に応じて、着花量を加減する。

イ　芽かき、摘心は樹相を見ながら行う。中～軽程度の園は通常の管理とするが、被害の甚だしい園では当面、摘心等は行わず様子を見る。

（３）園の排水に心がけ、滞水した場合は速やかに排水を図る。

## ２　施設共通

### ＜事後対策＞

### ○排水対策

（１）施設周辺に湛水しているほ場は、速やかに排水溝を掘り、排水に努める。

（２）ハウス内に雨水が流入した場合は、できるだけ速やかに排水し、水が引いた後に、ベッドを整形するとともに中耕する。

（３）ハウス内に雨水が流入する等により、内部が多湿になって病気が発生しやすくなるので、防除指針に従い殺菌剤を散布する。
また、根の活性が低下するなど薬害が発生しやすい状態にあるので気をつける。

### ○突風・降ひょう対策

（１）突風や降ひょうによって施設が破損した場合は、ビニールの損傷箇所を早急に修理し、低温害を防ぐ。

（２）施設内の温度上昇により傷口から病気の侵入のおそれがあるときには、殺菌剤の散布により病害の発生を防止する。また、液肥の葉面散布等により生育の回復に努める。

## ３　野菜

### ＜事後対策＞

### （１）野菜共通

### ○排水対策

ア　速やかにほ場の排水を図る。

イ　栽培中の作物には、防除指針に従い殺菌剤を散布し病気の予防に努める。根の活性が落ちるなど、薬害が発生しやすい状態にあるので気をつける。

ウ　栽培中の作物では、土壌の表面が乾いてきたら、追肥用化成などを用いて追肥を行い、軽く中耕を行うことにより、生育の回復を促す。

### ○突風・降ひょう対策

突風や降ひょうによって生じた傷口から病害感染のおそれがあるので薬剤を散布する。特に、今後の天候によって以下の病害の発生が懸念されるので注意する（カッコ内は　　病原菌の生育適温）。

炭疽病（22～28℃）、疫病(28～30℃)、べと病（20～25℃）、つる枯病（20～24℃）、褐色腐敗病(28～30℃)、菌核病（18～20℃）、軟腐病（30℃）

### （２）すいか・メロン

果実や茎葉に損傷を受けた場合は、薬剤散布を行うとともに、薄めの液肥を葉面散布し、草勢の回復に努める。

**（３）じゃがいも・食用とうもろこし**

葉・茎の傷口等から疫病等の発生のおそれがあるので、薬剤の散布を行う。

また、被害が軽度のものについては、葉面散布の実施や速効性の肥料を施用して生育の維持・再生を図る。

**（４）ねぎ類・にら**

葉の傷口から病害の侵入・発生のおそれがあるので、薬剤の散布を行う。倒伏した場合は、天候とほ場の状態の回復を待って、丁寧に起こす。また、株養成期の畑は、追肥等の管理を適期に行う。収穫期にあるにら畑では、葉の損傷がひどく、出荷が困難な場合は　早めに損傷葉を刈取り処分し、新たに葉の伸長を促す。

## ４　水稲

**＜事前対策＞**

突風や降ひょうに備え深水に管理する。ただし、過去に冠水があった圃場では排水を優先し冠水を避ける。なお、雨や風が激しくなっている場合は大変危険なため、増水した排水路や河川には近づかない。

**＜事後対策＞**

降雨後にイネの冠水が見られた場合は速やかに排水を図る。冠水したイネはいもち病や黄化萎縮病の病気が発生しやすく、発生を確認したら早急に薬剤防除を実施する。

## ５　麦類

**＜事前対策＞**

小麦は間もなく収穫時期を迎えるため十分な排水対策を実施する。

**＜事後対策＞**

倒伏した麦が水につかると品質が低下するため速やかに排水を図る。被害がある場合は、程度別に収穫・調製するなど全体の品質低下を避ける。